

魚と白鳥

小川未明

青空文庫

河かわの中なかに、魚うおが、冬ふゆの間あいだじつとしていました。水みずが、冷つめたく、
 そして、流ながれが急きゆうであつたからであります。水みずの底そこは、暗くらく、陰いん
 気んきでありました。

魚うおの子こ供どもは、長ながい間あいだ、こうして、じつとしてゐることに退たい屈くつ
 をしてしまいました。早はやく、水みずの中なかを自由じゆうに泳およぎたいものだと、
 体からだをもじもじさしていました。

けれど、母ははおや親おやは、よくいい諭さとしたのであります。

「もうすこし辛しん棒ぼうしておいで、じきに春はるになる。そうすれば、
 水みずの上うへが明あかるくなつて、水みずもあたたまりますよ。そうなつたら、
 自由じゆうに泳およぐことを許ゆるしてあげよう。」

子供は、お母さんに、こういわれると、おとなしくしていなければなりません。しかし、それは、元気のいい子供には、なかなか退屈なことでありました。

ある日のこと、子供は、急に、頭の上が、赤く、ちらちらするのを見ました。子供は、喜んで躍りあがりました。

「なんとという、赤い、明るい光だろう。春になったのだ！」と叫びました。子供は、すぐにも、その赤い光を慕っていこうとしました。

すると、母親は、あわててそれを止めました。

「おまえ、あれは、月の光でも、太陽の光でもないのだよ。あれを見て、いこうものなら、たいへんなことだ。もう、おまえは、

二度と私のところへは帰ってこられない。あの赤いのは、人間が、火をたいているのだよ。そして、私たちをだまして、へ呼び寄せようとしているのです。もし、いつてごらん。人間が、大きな網で、みんなすくってしまおうから……。」と、いいきかせました。

子供は、なんとという怖ろしいことだろうと思ひました。じつと、水の底に沈んで、暗い上の方で、一とこだけ、赤く、電のように、ちらちらと火花を散らしているのを、怖ろしげにながめていました。

「お母さん、春になると、どうなるのですか？」
と、子供は、いいました。

子供は、去年の春、生まれたので、まだ、今年の春にはあわないのであります。すると、母親はいいました。

「春になると、水の上が、一面に明るくなるよ。けっして、あのように、一とところだけが、赤く、明るくなるというようなことがありません。」と、よく教えました。

子供はそれから、暗い水の底を、お友だちと、あまり遠くへはいかずに、泳いでいました。なんといつても、水の底は暗いので、それに、そこばかりにしていると飽きてしまって、早く、自由に、広い世界へ出てみたかったです。

「ほんとうに、早く、春がくるといいな。」
と、子供は、お友だちに向かっていたいました。

「春はるになると、水みずの上うえが一面めんに明あかるくなるということだから、よくわかるね。」

と、友ともだちは答こたえました。

「いったい、水みずの上うえから、上うえは、どんなところだろうか？ 見みた

いものだね。」

「水みずの上うえへ浮うかんで泳およぐと、空そらというものが見みえるそうさ。その空そらに、太たい陽ようも輝かがやけば、夜よるになると、月つきも出でるのだということだよ。」と、友ともだちは、だれからか聞いたことを語かたりました。

ある夜よのこと、水みずの上うえが一面めんに明あかるくなりました。子供こどもは、今こんど度んどこそ、春はるになつたのだと思おもいました。そして、友ともだちといつしよに母ははの許ゆるしも得えずに、勇ゆう気きを出だして、上うえへ、上うえへと浮うかんでみ

ました。

「僕^{ぼく}たちは空^{そら}を見よう。」

「月^{つき}を見ようね。」

こう彼^{かれ}らは、途^{とちゆう}中^{ちゆう}、希望^{きぼう}に輝^{かがや}く瞳^{ひとみ}を上^{うへ}に向けて、語^{かた}り合^あいました。

みんなは、とうとう上^{うへ}へ行って、頭^{あたま}を堅^{かた}いものに打^うちつけてしまいました。

「なんだろうね？」

と、一^{ひとり}人が叫^{さけ}びました。

「ああ、わかつた。空^{そら}に、頭^{あたま}をぶつつけたんだ。」
と、友^{とも}だちの一^{ひとり}人はいいました。

「どこに、月があるのだろうか……。」

「きつと、どつかに隠れているんだよ。」

みんなは、不思議な空の光に、感心しましたけれど、その光は、寒く、なんとなくすごかったのであります。

みんなは、怖ろしくなつて、また、水の底に沈んでしまいました。

「お母さん、もう春になつたんでしよう。あんなに、水の上が明るいもの、僕、みんなと上へいったら、空に、頭を打ちつけてしまった。」と、子供はいいました。

すると、母親は笑いました。

「まだ、春にはならないのだよ。そして、頭を打ったのは、空で

はありません。空そらは、それはそれは高いところにあつて、人間にんげんでも、そこまではいかれないのです。おまえの頭あたまを打うつたのは、氷こおりですよ。あまり寒さむいので、水みずの面おもてが氷こおりつています。」「とい
いました。

子供こどもは、これを聞きくと、がっかりしました。それから、どんなに、春はるのくるのを待まち遠とほしく思おもつたことでしょう。

しかし、ついに、春はるがやつてきました。

ある夜よ、頭あたまの上うへが、いつになく、明あかるく、青白あおしろく見みられたの
でした。

「とうとうおまえの待まつた、春はるがきました。今夜こんやは、おまえに、お月つきさまを見みせてあげよう。やっと氷こおりが解とけたのです。」と、母は

親はおやはいつて、子供こどもをつれて水みずの面おもてに浮うかびました。

なんとという、広いひろ、未知みちの世界せかいが、水みずの外そとにあつたでしょう？

子供こどもは、高いたか、雲くも切れのした空そらを見みました。円まるい、やさしい、

つきひかりつきひかり見みました。また、遠とおい、人間にんげんの住すんでいる森もりや、林はやしの

影かげなどをながめました。そして、お母かあさんにつれられて、さざな

みの立たつ、河かわの水すい面めんを、あちら、こちらと泳およぎまわったのであ

りました。

「これからは、一日いちにちましに、水みずの中なかも、暖あたたかに明あかるくなつてきま

す。そして、昼間ひるまは、太陽たいようが、河かわ一面めんに、火ひを点としたように、

明あかるく照てらすでしょう。そうになると、おまえは、じつとしては、

いられなくなりませよ。けれど、この水みずの上うへへ近ちかく出でてごらん

さい。そこにはおまえの大好きな餌が、たくさんに水の中に浮いています。そして、もし、おまえがそれを食べようものならたいへんだ。おまえは、針に引つかかって、人間ののために、水の上へ釣り上げられて、やがて死んでしまうのです。だから、けつして、おまえといっしよでなければ、水の上へは遊びにこられませんよ。」と、母親は、いいました。

子供は、なんとという窮屈なことだろうと思いました。

「お母さん、そんなら、私たちは、どんなところで遊んだらいいでしょうか。」と、子供は、母親にたずねました。

母親は、子供を振り向いて、

「人間が、岸では、釣りをしていますから、河の真ん中で遊ぶ

のですよ。そして、なんでも、ほかのものに、捕らえられそうになつたら、できるだけの力を出して、跳ねるのです。」と、母ははおは親やを教おしえました。

一日いちにちましに、水みずの中なかは暖あたたかになりました。そして、もはや、陰いん気きではなくなり、じつとしてはいられないように、明あかるい、かがやかしい日ひがつづいたのです。

子供こどもは、お母かあさんの許ゆるしなどを受うけるのをもどかしく思おもいました。ある日ひ、子供こどもは、ひとりで、河かわの真まん中なかへ出でて、遊あそんでいました。だんだん、上うえへ、上うえへと、太たい陽ようのよく当あたる方ほうへ、慕したつて登のぼりました。

なんとといううれしい光ひかりでしょう。子供こどもは、跳はねたくまりました。

走りたくなくなりました。どこまでもいつてしまいたくなくなりました。

太陽の光のさすところ、水の中は、うす青く、平和でありました。子供は、うれしさを我慢していることができなくなつたのであります。

二度、三度、水の面へ白い腹を出して、跳ね上がりました。

ちようど、このとき、どこにいて、狙っていたものか、もう一度、子供が跳ね上がったとき、一羽の白鳥が、巧みに子供をくわえてしまいました。

子供は、驚きました。そして、身をもだえました。しかし、なんのかいもなかつたのであります。

「どうか、私を助けてください。お母さんが、待っています。」

と、子供は、水の上を、自分じぶんをくわえて飛とんでいく、白鳥はくちように向むかって頼たのみました。

白鳥はくちようは、なんで、子供こどもの訴うえを聞ききいれましょう。子供こどもをくわえて、ある大おおきな岩いわの上うへへ止とまりました。そして、魚うおの子こ供どもを岩いわの上うへにおいて、いいました。

「もう、おまえは帰かえることができない。俺おれは、おまえを捕とらえると、すぐちいにひとのみにしてしまおうと思おもったが、おまえちいみたいな、小さなものをのんだからとて、なにも腹はらの足たしになるものでない。それよりも、俺おれの子こ供どもに食たべさしてやりたいために、ここまで持もつてきたのだ。」と、情なさけなくいいました。

子供こどもは、お母かあさんのいうことをきかなかつたことを、はじめて

後悔こうかいしました。

白鳥はくちようは、岩いわの上うえで、自分じぶんの子供こどもを呼びよびました。すると、どこからか、小さな白鳥はくちようが、日ひの光ひかりに、雪ゆきのように、白しろい翼つばさを輝かがやかして、飛とんできました。

「おまえの大好きだいすな魚うおを持つてきてやったよ。」と、白鳥はくちようの母親ははおやは、子供こどもに向むかっていいました。

小さな白鳥はくちようは、珍めづらしそうに、かわいくろい、黒まるい円めい目めつきで、魚うおをながめていました。

「さあ、よくかんでお食たべ。」と、母親ははおやは、小さな白鳥はくちように、注意ちゅういをしていました。

このとき、魚うおの子供こどもは、母親ははおやが、いつでも、危あぶなかつたとき

には、できるだけちからの力を出だして、跳はねろ！ といったことを、思おもい出だしました。彼かれはふいに、命いのちかぎりの力を出だして、跳はね上あがりました。

魚うおの子供こどもは、岩いわを飛とび越こして、水みずの中なかへ落おちました。彼かれはしめたと思おもうと、すぐふかに、深ふかく、深ふかく、水みずの底そこに沈しずんでしまいました。白はくちよう鳥ちうは残ざん念ねんがりました。そして、子供こどもの白はくちよう鳥ちうに、注ち意ゆういが足たりないといつて、しかりました。小ちいさな白はくちよう鳥ちうは、ただ驚おどろいて、目めをみはつておどろいているばかりでした。

しかし、この経けい験けんによつて、魚うおの子供こどもは、りこうになりました。もうけつして、うかつには跳はねられないことを知しりました。また、どういうときに、自じ分ぶんは跳はねなければならぬかということ

を学びました。

小さな白鳥は、はじめで、これによつて、敏捷な、本

性を目ざめさせられたのです。こののち、どんなときに、油断をしてはならないかということを知りました。

春も過ぎて、夏のところには、魚の子供は、もう、大きくなりました。やがて、お母さんになりました。小さな白鳥も、大きくなりました。そして、魚は、水の中を気ままに、泳ぎまわり、白鳥は、空を、自由に翔けていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「童話」

1924（大正13）年3月

※表題は底本では、「魚《うお》と白鳥《はくちよう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚と白鳥

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>